茶の間の
スミッコにでも置いて頂け
たら幸いです

平成七年
歌の日記

小菅章雄

序

私は今年六十一歳になります。
いよいよ人生の終盤を迎えたので、一日一日を大切にしたいと思うようになりました。
そこで、一日に一首ずつ歌を詠んで、その日の記録にしてみようと思いました。
歌は、できる時には、十首、二十首と、いくらでも出てくるものですが、出てこない時はさっぱりできません。
調子よく歌が生れそうな日でも、作るのは一首だけとしました。
なぜかというと、私は洋画家であって、歌人ではないからです。
歌を詠むことが面白くなって絵の方がおろそかになっては困るからです。
それとは逆に、歌を詠む気持にならない日もあります。
また、作りたいという気持ちはあっても、さっぱり出てこない日もあります。

そのような日でも一首は必ず作ること、と決めました。無理をしても、一首はひねり出さないと、これは日記ではなくなるからです。

私は、若い頃日記をつけていました。短歌ではなく、ごく普通の散文で記したものです。

しかし、それは全部焼却してしまい今は残っていません。

なぜ焼いてしまったかというと、後で読みかえして、恥しくてとても残しておく気にならなかったからです。

普通の文章では、その日その日の行動や感情が、生生しく表わされてしまい、焼いてしまいたい気持ちにもなりますが、短歌にはそれが無いのですから不思議なものです。

平成七年三月十九日

小菅　章雄

一月

① 大気澄み雲なき空を仰ぎみて風に耐えつつ初日の出待つ　（一月一日）

② 窓際の小さき鉢を今朝見れば黄なる花びら散りし福寿草　（一月二日）

③ あすからの仕事に思いめぐらしつ東西寄席をしばし楽しむ　（一月三日）

④ 三箇日終るを待てるかの如く今朝は雨降る雑用に行く　（一月四日）

⑤ 早暁の家並みを包み霞立つ昨夜の雨に洗われし街　（一月五日）

⑥ 新春の賀詞交歓の会という名前も顔も知らぬ集まり　（一月六日）

⑦ アトリエの陽あたりに置くサボテンの赤と白とが競いて咲けり　（一月七日）

⑧ 教室に絵をかく熱気もどりけり三人ばかり休みおれども　（一月八日）

⑨ 異国なる孫の世話をばせむがため妻は旅立つただ一人して　（一月九日）

⑩ 夕食は何にせんかと思い悩み豆腐三丁求めて帰る　（一月　十日）

⑪ 声かろくニューヨークからの電話ありママの手術が無事終りしと　（一月十一日）

⑫ 冷えこみし道に連なる通夜の列懐しき顔かなたに見えり　（一月十二日）

⑬ 駅頭で電車着く間のしばらくを紺碧の空飽かず見つめる　（一月十三日）

⑭ せかせかと一週間を過ごしけり予定詰まりしカレンダー見る　（一月十四日）

⑮ 久々の心のゆとりかみしめて厚焼たまごに挑戦をする　（一月十五日）

⑯ ラジオでは貴乃花関の土俵入り聴くともなしに絵筆動かす　（一月十六日）

⑰ 関西の激しき地震聞きし朝吾家の庭の霜柱踏む　（一月十七日）

⑱ 納税の指導を待てば隣より女性の声の絶えず響けり　（一月十八日）

⑲ 寒風に身震いしつつペタル踏む涙にじませメシ買いに行く　（一月十九日）

⑳ 換気扇の音の聞こえる教室に絵筆動かす音も聞こえる　（一月二十日）

㉑ 久々にきようは風なし日だまりに自転車出して空気入れする　（一月二十一日）

㉒ スペインで昔求めし燭台にローソクともす停電の朝　（一月二十二日）

㉓ 雨戸閉めきよう一日を思うとき地震のニュース今も流れる　（一月二十三日）

㉔ 歳とりしあかしなる哉今朝もまた早く目覚めて寒さ身にしむ　（一月二十四日）

㉕ 青き空白きビル街かきわけてスカイライナーひた走りゆく　（一月二十五日）

㉖ 松の緑緋のもうせんの輝きて紫映える義経の衣（きぬ）　（一月二十六日）
―歌舞伎座にて勧進帳を見る―

㉗ 悲しきは才無き吾よきようもまた老いの楽しみ賞めて禄食む　（一月二十七日）

㉘ 夕方の半端な時間もてあまし花屋の前でしばし佇む　（一月二十八日）

㉙ あしたこそ心ひきしめ絵をかかむ冬陽眩しき教室の窓　（一月二十九日）

㉚ ラジオでは地震のその後伝えおり絵筆を置きてしばし聞き入る（一月三十日）

㉛ 焼香を終えて電車に揺られつつ四十年の交わり想う（一月三十一日）

二月

㉜ アトリエに流れるポールモーリアの曲を聴きつつ絵具出しおり（二月一日）

㉝ 通夜終えて田舎の駅に一人立つ凍てつく如くともる燈し火（二月二日）

㉞ 駅前の歩道に並ぶパンジーの今朝の寒さにこごえて咲けり（二月三日）

㉟ 話し声も靴音もなく人々の影絵のごときたそがれの街（二月四日）

㊱ くもりたる冷たきガラス手で拭きてバスの窓より雪景色見る（二月五日）

㊲ かにかくに絵をかくことの有難き絵筆片手に夕空を見る（二月六日）

㊳ 五十万是非とも欲しと思いつつ駅の階段うつむき登る（二月七日）

㊴ ストーブを消せる日和のアトリエに加湿器ばかりひとり湯気吐く　（二月八日）

㊵ 籐椅子に一人横たわりもの想う古りしアトリエの壁を見つめて　（二月九日）

㊶ 活断層ボランティアなどの言葉あり油絵サークルで主婦等話せる　（二月十日）

㊷ 今日もまた曲を流さむアトリエにグレンミラーの古きテープを　（二月十一日）

㊸ 朝の駅エスカレーターも新しくおのずと心はなやぎにけり　（二月十二日）

㊹ 近頃の習いとなりし体操をすませキャンバスに向かわむとする　（二月十三日）

㊺ 傘させる皆うつむきて声もなし春雨けむる朝の駅前　（二月十四日）

㊻ 油絵の小品仕上げ風呂に入れば肌にやさしく湯の出ずる音　（二月十五日）

㊼ 気がつけば庭のおちこち雑草の顔出しており春来るらし　（二月十六日）

㊽ 震災の募金に立てる墨染の若き僧侶は北風の中　（二月十七日）

㊾ ポーズ終え上着まといて壁に寄るヌードモデルのうつろな瞳　（二月十八日）

㊿ 伊勢丹のウインドに立つマネキンもパステルカラーで春告げており　（二月十九日）

(51) この店の支店長なるか朝早く道路掃きおりコート着たまま　（二月二十日）

——武蔵野銀行七里支店にて——

(52) 今朝もまた雨戸あければ雲もなく寒気厳しき金色（こんじき）の空　（二月二十一日）

(53) 窓の外もう暗かりき昼寝よりテレビドラマの声で目覚める　（二月二十二日）

(54) これからは常に無理せずのんびりと自然のままに生きたしと思う　（二月二十三日）

(55) 手袋を忘れしままに街を行くやさしき陽射し風もやさしく　（二月二十四日）

(56) あたたかさ目には見えぬどきのう今日遅く目覚めぬ春は来たるか　（二月二十五日）

(57) 春の雪はげしく降れど積らずに濡れる道路に舞いおりて消ゆ　（二月二十六日）

(58) こんな日もたまにはいいではないかなど自分に言いて朝昼の酒　（二月二十七日）

⑤⑨ 手袋もコートもなしに街ゆけば花屋の店に桃のほころぶ　（二月二十八日）

三月

⑥⓪ 昨夜より咳込みし風邪まだやまず今日は休まむ外もみぞれぞ　（三月一日）

⑥① 女一人けなげに生きる姿あり森山良子の渋いステージ　（三月二日）

⑥② 胸苦し咳のとまらず汗も出て授業おわるをただ待ちており　（三月三日）

⑥③ すがすがし春まだ浅き奈良の森の黄なる芝生と歩み来る鹿
——奈良ホテルで行われた結婚式に出席——　（三月四日）

⑥④ 大和路の旅の疲れのまだ残るからだひきしめ教室にゆく　（三月五日）

⑥⑤ 正月に妻の求めしパンジーの日だまりの中競いて咲けり　（三月六日）

⑥⑥ 春風に陽の輝きて風邪も癒えコートを脱ぎて街を歩ける　（三月七日）

⑥⑦ 朝起きてしばらくぶりに庭を掃く登校の子等の声聞きながら　（三月　八日）

⑥⑧ 二十日ほどで日本に帰る喜びの嫁の電話をわれ一人聞く　（三月　九日）

⑥⑨ 電車より梅の花咲く丘の見ゆ白うす紅に春雨の降る　（三月　十日）

⑦⓪ 玄関で吾を迎えるかの如き明りのともる水槽の魚　（三月十一日）

⑦① わが庵（いお）は大宮駅を私鉄にてさらに自転車と人に話せる　（三月十二日）

⑦② パレットを拭きつつまたも落ち込みぬいつものことと呆れながらも　（三月十三日）

⑦③ 皿うどんに瓶ビールそして酒二本それが入ればまずは健康　（三月十四日）

⑦④ 資源ゴミ持つ手に今朝は寒さなく帰れば庭に沈丁花咲く　（三月十五日）

⑦⑤ 何するということもなくアトリエにこもる一日霧雨の降る　（三月十六日）

⑦⑥ 仕事終え床屋に行きて二時過ぎの遅き昼飯酒も味わう　（三月十七日）

77 ゆったりとした暮のせりあがりその中にある緊張を見る　（三月十八日）

78 世の中の働きざかり気がつけば吾より若き人ばかりなり　（三月十九日）

79 人殺すことに悦び得る人のこの世にあるを不思議に思う
——サリン事件起こる——　（三月二十日）

80 彼岸会のきな粉の餅を一つ食べ春の制作の筆を休める　（三月二十一日）

81 六十を一つ過ぎれど変らずにラジオ聞きつつ絵筆動かす　（三月二十二日）

82 ごみを焚く焔みつめて想うこと午後の制作いかに描かむ　（三月二十三日）

83 暖かくなりしもの哉朝起きてストーブともす否か迷いぬ　（三月二十四日）

84 朝からの冷たき雨を眺めつつわが来し方を思い出しおり　（三月二十五日）

85 朝起きて雨戸開ければ驚きぬ真冬のごとく降りしきる雪　（三月二十六日）

86 久々に電車に乗りてリズミカルな車輪の響き楽しみており　（三月二十七日）

87 桃の花こぶしの花と競い咲きぬるき風吹くななさとの春
（三月二十八日）

88 しみじみとわが両腕をみつめればシミやホクロの多くなりたる
（三月二十九日）

89 彼等いまいづこの空か疲れ果て故国に着くを待ちわびるらむ
——長男一家アメリカより帰国——
（三月三十日）

90 朝起きて孫の手をひき歩きおれば木々は芽吹きて雨あがる里
（三月三十一日）

四月

91 教室で生徒とともにデッサンを描きて帰るバスに揺られて
（四月一日）

92 みな正装島台もある初節句古きしきたり守る人々
——茂原市近郊にて、旧家の長男の初節句の祝いに出席——
（四月二日）

93 有意義か否かと今日の一日をふりかえりつつ布団をかぶる
（四月三日）

94 鬼ごろし司牡丹に高清水 酒びん並ぶここはとまり木
（四月四日）

95 自転車に孫と相乗りうららかな春の日浴びて田舎道行く
（四月五日）

(96) わずらわしき浮世の義理を切り上げて家路急ぎぬ孫と遊ばむと　（四月六日）

(97) うす紅(べに)で描きしごとく花咲ける上野の山に霧雨の降る　（四月七日）

(98) 桜咲く団地の隅の遊び場の孫の笑顔に花びらの舞う　（四月八日）

(99) わがための仕事の糧(かて)になるらむとモダンアートの展覧会見る　（四月九日）

(100) 秩父路は空青々と山々の樹々は芽吹きて桜咲く見ゆ　（四月十日）

(101) 風邪ひきてくしゃみ鼻水ばかりなる歌にもならぬ今日の日悲し　（四月十一日）

(102) 桜木のあまた落とせる花びらを傘させる人踏みて過ぎゆく　（四月十二日）

(103) 新緑を背に噴水のきおい立ち上野の森の春行かむとす　（四月十三日）

(104) 夕暮の道に花弁の積りたる真紅の椿雨にうたれて　（四月十四日）

(105) 孫のため求めし絵本教室の授業のあいまに眺めておりぬ　（四月十五日）

106 やぼ用の外出ばかり続く日々絵筆も持てぬ春あわれなり（四月十六日）

107 われ一人孫をあずかり添い寝して寝つくを待ちて雑用をする（四月十七日）

108 今日もまたせわしく過ぎぬ一日を思い返しつ家路いそぎぬ（四月十八日）

109 水割りを味わい今日も暮れゆきぬ窓の外には強き風吹く（四月十九日）

110 むずかりて体洗うもままならず昼寝忘れし孫と風呂に入る（四月二十日）

111 この眠気いかなる眠気添寝して孫と本読む生欠伸（なまあくび）でる（四月二十一日）

112 久々にキャンバスに向かい想を練る孫のいぬ間の静かなる時（四月二十二日）

113 街角のパン屋の前のチューリップなぎたおされて強き風吹く（四月二十三日）

114 エアコンを冷房にする蒸し暑さ外には今日も強き風吹く（四月二十四日）

115 俳句とは如何なるものか難解な作並びける友の句集に（四月二十五日）

116 妻と孫バスで出かけしそのひまに一人のんびり新聞を読む　（四月二十六日）

117 アトリエにチャイコフスキーの曲流し久方ぶりに小品描く　（四月二十七日）

118 駅前にリュック背負いし子等の声遠足の季節来るを知りぬ　（四月二十八日）

119 行楽の人ごみの中額縁の箱をかかえて仕事場へ行く　（四月二十九日）

120 円生の落語のテープ聞きながらかきかけの絵を一人眺める　（四月三十日）

五月

121 一日を何するとなく過ごしけり雨音聞きて孫と眠らむ　（五月一日）

122 夕食は外ですませて早々と薬を飲みて布団に入る　（五月二日）

123 またしても知人の逝きぬ斎場の重き読経と重き雨空　（五月三日）

(124) ファックスが入り吾家の生活が豊かになりし錯覚覚ゆ　（五月四日）

(125) 連休は雨空ばかり端午の日とどめ刺すごと強き雨降る　（五月五日）

(126) 登校の子等も声なく下向きて一列に行く今朝も雨空　（五月六日）

(127) ひとときを小朝（こあさ）の芸に親しみて駅にむかいぬその人達と　（五月七日）

(128) あきれける今朝も曇れり五月（さつき）晴れの言葉忘れし今月の空　（五月八日）

(129) せかせかと歌にもならず味気なくただいそがしく一日終る　（五月九日）

(130) 風呂に入らむ風呂に入らむと思いつつも雑事に疲れそのままに寝る　（五月十日）

(131) 昼までに浮世の仕事片付けてただ眠りける日暮れ時まで　（五月十一日）

(132) 定食にサービスで付くコーヒーを一口飲みてもてあましおり　（五月十二日）

(133) 教室の指導のあいまのひと時に今日一日を思いかえせる　（五月十三日）

(134) わが庵は田舎なるかなわれと孫のただ二人にてバスに乗りおり　（五月十四日）

(135) 渇水に悩みしダムも放水を始めたというニュース聞きける　（五月十五日）

(136) 若き娘も老女にちかきウエイトレスも皆小走りの昼の食堂　（五月十六日）

(137) 雲間より太陽のぞき久々の五月の空を楽しめるかな　（五月十七日）

(138) 一点の雲なき空に若葉映え大気澄みたる五月晴れかな　（五月十八日）

(139) 五月晴れ忘れし如く教室にこもり絵をかく人々もあり　（五月十九日）

(140) パレットのそうじをすれば学校の昼の放送風に乗り来る　（五月二十日）

(141) 胃の痛む体かばいて教室で十年勤めし表彰を受く　（五月二十一日）

(142) その前に絵をかかむとぞ思いける午後から孫の来ると聞きしに　（五月二十二日）

(143) 食堂の窓より外を眺めれば五月の空をつばくらめ飛ぶ　（五月二十三日）

(144) 一日を孫の子守りに終えし妻孫より先に深く眠りぬ　（五月二十四日）

(145) 公園で遊び疲れしわが孫を背負いて帰るたそがるる街　（五月二十五日）

(146) 何やらむ孫を背負いしためなるか朝から腰に痛みありけり　（五月二十六日）

(147) 車窓より暮れ方近き陽の差せる若き女性を浮き彫りにして　（五月二十七日）

(148) 会計のカバンかかえて混みあいし電車に揺られ今日も暮れゆく　（五月二十八日）

(149) 新幹線乗りてはしゃぎし孫は今疲れ眠りぬわが膝の上　（五月二十九日）

(150) 雑用で新聞読む間なかりしを更けゆく夜に悲しく思う　（五月三十日）

(151) 公園で孫を遊ばせその足で買い物もする妻と吾とで　（五月三十一日）

六月

(152) 素晴らしき初夏の日差しを鉄筋の薄暗き部屋で一日過ごす　（六月一日）

(153) 華やかなチョゴリ姿と裏腹のけだるき瞳モデルの瞳　（六月二日）

(154) 昼からの会議会議で夜遅くバスに揺らるる心沈みて　（六月三日）

(155) 長き髪真紅の服に白き肌疲れし吾を慰むるごと　（六月四日）

(156) いかにせむかくも幼き命をば熱の襲いて苦しめており　（六月五日）

(157) 熱高き孫に起こされ空見れば寒々として重き灰色　（六月六日）

(158) サンダルをはきて近くをそぞろ歩く腸の検査を気遣いながら　（六月七日）

(159) 六十を一つ過ぎればさまざまの体験をして今日も老いゆく　（六月八日）

(160) 雲厚く人の往き来も少なかり梅雨（つゆ）に入りたる春日部の街　（六月九日）

(161) 雨あがり夾竹桃の落葉掃く土曜の朝の静かなる時　（六月十日）

(162) ROKUROの新緑の絵に魅せられて週刊新潮求めて帰る　（六月十一日）

(163) 田植え終え緑つらなる果てしなき見沼田圃は梅雨寒の空　（六月十二日）

(164) クククと孫は笑いぬ目覚めると思えばまたも深く眠りぬ　（六月十三日）

(165) 草枕旅の宿にてくつろげば闇の奥より湯の出ずる音　（六月十四日）

(166) 今さらに小さき哉と驚きぬ孫の背中にシャボン塗る時　（六月十五日）

(167) 雑用に追わるることを嘆くとも人は笑いて哀れみもせず　（六月十六日）

(168) 新しき生命（いのち）生れし興奮を抑えて今日も教室に行く
——二人目の孫の誕生の日に詠める——　（六月十七日）

(169) ビーフンとポテトフライをぶらさげて留守のわが家の扉を開ける　（六月十八日）

(170) 雑用に追われ絵筆の持てぬ日の早く終わるをただ祈るのみ　（六月十九日）

(161) 雨あがり夾竹桃の落葉掃く土曜の朝の静かなる時　（六月十日）

(162) ROKUROの新緑の絵に魅せられて週刊新潮求めて帰る　（六月十一日）

(163) 田植え終え緑つらなる果てしなき見沼田圃は梅雨寒の空　（六月十二日）

(164) クククと孫は笑いぬ目覚めると思えばまたも深く眠りぬ　（六月十三日）

(165) 草枕旅の宿にてくつろげば闇の奥より湯の出ずる音　（六月十四日）

(166) 今さらに小さき哉と驚きぬ孫の背中にシャボン塗る時　（六月十五日）

(167) 雑用に追わるることを嘆くとも人は笑いて哀れみもせず　（六月十六日）

(168) 新しき生命（いのち）生れし興奮を抑えて今日も教室に行く
——二人目の孫の誕生の日に詠める——　（六月十七日）

(169) ビーフンとポテトフライをぶらさげて留守のわが家の扉を開ける　（六月十八日）

(170) 雑用に追われ絵筆の持てぬ日の早く終わるをただ祈るのみ　（六月十九日）

(171) アトリエにゴミのたまるは悲しけりみな雑用のゴミにしあれば　（六月二十日）

(172) 久々に小庭に出ててゴミを焚く樹々に陽の射す梅雨晴(つゆば)れの朝　（六月二十一日）

(173) 梅雨寒(つゆざむ)の風に背をむけかばいつつ賜女児を抱きてタクシーを待つ
——二人目の孫の退院に付添いて——　（六月二十二日）

(174) 孫達は嫁の実家にありし朝一人黙して新聞を読む　（六月二十三日）

(175) つゆ寒に薄暗き部屋ただ一人ストーブつけて昼食をとる　（六月二十四日）

(176) 思いきり絵をかくことのできる日をかたく信じて今日も終りぬ　（六月二十五日）

(177) 書の道をただに歩みし人は今凜と話せる病(やまい)にあれど　（六月二十六日）

(178) つゆ寒の道に蕾の散り敷きて夾竹桃の咲かざりしかな　（六月二十七日）

(179) ああでもないこうでもないと構図練るむしむしとするアトリエに居て　（六月二十八日）

(180) 今朝見れば濃き緑なる草むらにクチナシ咲けり真白きその花　（六月二十九日）

(181) 昼寝して少し酒飲みグチこぼしいつの間にやら半年たちぬ　（六月三十日）

七月

(182) 七里（ななさと）の夏はまだまだ遠かりき背広着たまま駅に向かえり　（七月一日）

(183) 水量を増して流るる川中で鮎釣る人や下野（しもつけ）の旅　（七月二日）

(184) その昔鮎を食いたるひなびたるおもかげも無き下野の川　（七月三日）

(185) 若鳥の毛をむしりたる如くなる赤女児とともに風呂に入りける　（七月四日）

(186) 長雨に人の心もふさぐ中小庭の花もくちはてにけり　（七月五日）

(187) 雨やみて道のぬかるみよけながら買い物に行く妻と孫つれ　（七月六日）

(188) 昼前に太陽のぞき喜べど今は雨雲家路いそぎぬ　（七月七日）

(189) 雨強く明（あか）りを消せば昼過ぎの部屋は夜中の如く暗かり　（七月八日）

190 駅前の選挙演説横に見て吾はいそいそ家路いそぎぬ　（七月九日）

191 思いがけず晴れたる空に驚きて窓開け放ち深呼吸する　（七月十日）

192 ハンカチで汗ぬぐうあり扇ぐあり不意の暑さにあえぐ人々　（七月十一日）

193 アトリエに煙草を吸いて椅子に寄りただ蒸し暑く今日も暮れゆく　（七月十二日）

194 着せ替えの人形楽しむごとき目で妻は選びぬ孫の夏服　（七月十三日）

195 なけなしの財布はたいて求めたる大きなる壷の深きその青　（七月十四日）

196 ななさとの駅のベンチで電車待つ傾きし陽のまぶしき中で　（七月十五日）

197 さりげなく花屋にありし鬼燈（ほおずき）を描かむと思い求めて帰る　（七月十六日）

198 人生の先の見えしを悲しみてうつむき歩む夜の雨の中　（七月十七日）

199 あたふたと銀座へ行きて三つほど個展を覗きあたふた帰る　（七月十八日）

200 生れきてまだひと月の孫抱きて風呂に入るなり目と目を合わす
（七月十九日）

201 一日の過ぎるぞ早き食事して絵をかきおれば今日も暮れゆく
（七月二十日）

202 学校は夏の休みに入りし日も冷たき雨の降りしきる街
（七月二十一日）

203 つゆ空の武蔵の国の一の宮孫を抱(いだ)きて神前に立つ
——二人目の孫の宮参りに付添いて——
（七月二十二日）

204 投票をすませ吾家の雨戸開け庭を掃きおり青空のもと
（七月二十三日）

205 冷房も効かぬ猛暑のアトリエの仕事切り上げ逃げ出しにけり
（七月二十四日）

206 朝からの猛暑の汗でグショグショに濡れしハンカチもてあましおり
（七月二十五日）

207 手と足をしばられし母顔むくみ荒き呼吸で横たわりけり
——秩父の母、急病で市民病院に入院——
（七月二十六日）

208 うっすらと母は目をあけ吾が顔をたしかめしあとまた閉じにけり
（七月二十七日）

209 山際の薄紅色(うすべにいろ)に染まる頃も母の寝息と扇風器の音
（七月二十八日）

210 アトリエの鬼燈(ほおずき)あわれ秋父より帰りてみれば枯れ果てにけり　（七月二十九日）

211 今どきに冷房のなき電車あり車内放送もうるさく聞こゆ　（七月三十日）

212 ぐっしょりと汗をかきつつ諸表示の筆を運びぬ講習を前に　（七月三十一日）

――光風会の夏季講習の準備の日に詠める――

八月

213 冷水器の水を飲みつつただ堪える夏季講習の初日の午後に　（八月一日）

214 赤らみてしわ深くして目は濁る鏡に映る老いしわが顔　（八月二日）

215 妻と二人講師手当の現金を袋に詰める汗を拭きつつ　（八月三日）

216 パスキンの絵を思わせる色紙かな裸婦ひとすじの先輩の筆　（八月四日）

217 雑用の外出のみに明けくれて今日久々に絵具に触るる　（八月五日）

(218) 次々と客降りて行き終わりには孫とわれのみ田舎のバスは　（八月六日）

(219) クーラーを効かせるためにカーテンを閉めしアトリエなお汗の出ず　（八月七日）

(220) 見渡たせば空のいずこも雲のなくただ照りつける立秋の朝　（八月八日）

(221) 秩父路に母を見舞えば車窓より沈まむとする日輪の見ゆ　（八月九日）

(222) 庭先で遊ぶ花火の紅き色の青に変わるを孫はよろこぶ　（八月十日）

(223) たらちねの母を見舞いて病院を出ずれば街に秋の風吹く　（八月十一日）

(224) 高速道は帰省の車で渋滞のニュース聞きつつ絵を眺めいる　（八月十二日）

(225) 「芝浜」の落語のテープ聴きながら百二十号の絵の前に立つ　（八月十三日）

(226) 汗拭きて絵具を出せるアトリエで盛暑よ去れとただ祈るのみ　（八月十四日）

(227) 冷房の部屋で酒飲み野球見てそして絵をかく外は盛暑ぞ　（八月十五日）

228 病室の外の激しき雷鳴も母は知らずに深く眠れる　（八月十六日）

229 夕方の陽の傾ける時を待ち階段のぼりアトリエに入る　（八月十七日）

230 夏ばての体をここで癒さむと鰻を二匹求めて帰る　（八月十八日）

231 ほんにもう呆れるばかりアトリエは夜更けし今も三十二度なり　（八月十九日）

232 連日の猛暑の続くわが庭に夾竹桃は今を盛りと　（八月二十日）

233 二人目の孫のアルバム貼りながら高校野球を楽しみており　（八月二十一日）

234 大きなるアルバムかかえ孫達を久々に訪う炎天の中　（八月二十二日）

235 怪獣のおもちゃで遊ぶ妻と孫眺めておれば眠けもようす　（八月二十三日）

236 秋父の街強き日射しは残れども日陰涼しく秋風の吹く　（八月二十四日）

237 この猛暑いつ終るらむ駅頭で汗を拭けどもすぐふき出でむ　（八月二十五日）

(238) 秩父宮妃逝去の報の地方紙に秩父市長の追悼のあり　（八月二十六日）

(239) 真夏日の日射しを受けしウインドは黒とえんじで秋の装い　（八月二十七日）

(240) 二十日ほど遅れて目には見えねども風の音にぞおどろかれぬる　（八月二十八日）

(241) 蝉しぐれオーシンツクも混じる中強き日射しに百日紅（さるすべり）咲く　（八月二十九日）

(242) 心地好きクーラーの音に身を委（ゆだ）ね今日一日をふりかえる時　（八月三十日）

(243) 秩父宮妃葬儀のニュース聞きし今久々の雨いらかを濡らす　（八月三十一日）

九月

(244) 学校に子どもの声のもどりきて仰ぎば空に秋の雲あり　（九月一日）

(245) 秋・秋・秋……秋を奏でるデパートの中をさまよい佇みており　（九月二日）

(246) 朝な朝な枯れし花をば落しつつ夾竹桃の季節は去りぬ　（九月三日）

(247) 研究会を終えて疲れし足はこぶわが家は遠き駅からの道　（九月四日）

(248) 秋の空秋の雲をば次々に朝のテレビは映し出しおり　（九月五日）

(249) 朝起きてまだ飯まえに手紙書き秋風の中そを出しに行く　（九月六日）

(250) 日没の早くなりしを驚きぬ秩父の町を煙草吸いつつ　（九月七日）

(251) さわやかに夕べ風吹く新宿で美術の秋にひたりて帰る　（九月八日）

(252) 自転車でいつもの角を曲るとき大ーシンックのあと追えるごと　（九月九日）

(253) 朝六時花火の音で目覚めけりはや運動会の頃となりしか　（九月十日）

(254) クーラーの音聞きながら絵にむかう夏のもどりしアトリエにいて　（九月十一日）

(255) 新聞の旅の広告眺めつつ大和の里に思いめぐらす　（九月十二日）

(256) 絵をかかむ絵をかかむとぞ思いつつ孫のアルバムの整理終らず　（九月十三日）

(257) 人生の哀れを想う吾が母の病院迫わるる話を聞きて　（九月十四日）

(258) 誕生の喜びそして終焉の哀れを想う孫をいだきて　（九月十五日）

(259) あす朝に台風接近するという激しき雨にバスを待つ列　（九月十六日）

(260) 曲作り自分で歌いピアノ弾き顔まで好しの男ありけり　（九月十七日）

(261) おおぜいに混りて母もりハビリを受けしが右手は動かざりけり　（九月十八日）

(262) いい陽気になりましたねと会う人の笑顔と今朝の深き青空　（九月十九日）

(263) 孫二人連れて買い物楽しみて散策もせり妻と吾とで　（九月二十日）

(264) 遊園地の砂場で遊ぶ嫁と孫吾は木陰で赤児眠らす　（九月二十一日）

(265) 砂遊び飽きずに孫は動かざり日暮れの近き遊園地にて　（九月二十二日）

(266) がっくりと肩を落してバスに乗る研究会の終りたる夜　（九月二十三日）

(267) 弟の食い初め祝う食膳の石拾う姉何思うらむ　（九月二十四日）

(268) 気がつけば孫は眠りぬアトリエで絵筆動かす吾のうしろで　（九月二十五日）

(269) 朝早く皆眠りいしこの時にたまりし雑務片付けており　（九月二十六日）

(270) 絵をかきてグッタリ疲れ鰻屋で友とくつろぐこの酒の味　（九月二十七日）

(271) もの言えぬ母のやつれし左手に父より受けし指輪ありけり　（九月二十八日）

(272) 凝りすぎて大きさの無き噴水を惜しみて眺む時間あまりて　（九月二十九日）

(273) 薄日射す他に誰もいぬ遊園地孫一人のみブランコに乗る　（九月三十日）

十月

(274) 夕方のまだ飯まえのひと時を振り掛け作りに精出しており　（十月一日）

275 夜の道を疲れしからだ気づかいて自転車を漕ぐ明りたよりに　（十月二日）

276 久しぶりに友と出合いてビール飲み豆腐味わい語らいにけり　（十月三日）

277 悲しきは歳とりしことそしてまた人を妬みて傷つきしこと　（十月四日）

278 燗酒を楽しむ秋となりにけり友と語らう刺身愛（め）でつつ　（十月五日）

279 痔の痛みこらえて椅子に坐りけり疲れ溜りしわがからだ哉　（十月六日）

280 痔の痛み加えて肩も固く凝り弱きからだに秋の風滲む　（十月七日）

281 改装で店の隅まで輝ける花屋を包み秋の雨降る　（十月八日）

282 九坪を広きと愛でしアトリエも夜具敷くこともままならぬなり　（十月九日）

283 アトリエで絵をかく吾の傍らで独（ひと）り言して孫は遊びぬ　（十月十日）

284 乳飲子は布団の上に横たわり早く抱（いだ）けと吾を呼ばわる　（十月十一日）

285 世の中の煩わしこと無き暮しわが行く末に来ることやある　（十月十二日）

286 公民館の窓より秋の樹々見えて枝のはざまに青き空見ゆ　（十月十三日）

287 平凡な仕事ぶりとぞ思いつつも朝の四時より絵筆動かす　（十月十四日）

288 久々に酒に酔いたり自転車に乗れば危うく転がして行く　（十月十五日）

289 日展の制作終えて夜遅く仲間と別れ田舎道行く　（十月十六日）

290 秋深き上野の森に遊びけり泣きたきほどの青き空かな　（十月十七日）

291 歳とりしためか異国に興失せて大和の旅を夢見ておれり　（十月十八日）

292 午後からのテレビのニュース横に見てわが特製の振り掛け作る　（十月十九日）

293 絵を描くこのデパートの教室に正午の時報長く響けり　（十月二十日）

294 絵をかきて昼飯食いて昼寝して自転車に乗りて教室に行く　（十月二十一日）

295 義弟より貰いし中古の背広着て懇親会の司会に励む　（十月二十二日）

296 孫は歌う「アリさんとアリさんがごっつんこ」青空のもとブランコに乗りて　（十月二十三日）

297 チューリップの球根植える妻と嫁孫の喜ぶ春の来るを　（十月二十四日）

298 何をせしか今日一日をかえりみればただ昼寝して孫と遊べる　（十月二十五日）

299 大声であたりにわめく老姿ありわが母の住む山里の家　（十月二十六日）

300 人々は電車に揺られ眠りける青くて高き空にはあれど　（十月二十七日）

301 起きいだし次の仕事の構図練るまだ覚めやらぬ冷たき朝に　（十月二十八日）

302 朝起きてストーブを焚く頃となる外まだ暗き十月の風　（十月二十九日）

303 アトリエで昼寝をすれば添い寝せる赤子の声で目を覚ましけり　（十月三十日）

304 昼前の仕事を終えて立ち寄りし店の少女の白き指かな　（十月三十一日）

十一月

305 新聞を開きてあっと驚きぬ残りはわずかふた月なりき　（十一月一日）

306 窓際の金（かね）のなる木を眺めつつ金のなる木の育たざりしを　（十一月二日）

307 風に乗りて運動会の声聞こゆ駅のホームで電車待つとき　（十一月三日）

308 大きなる象はだらりと鼻垂れて立てるままにて眠りおるよし　（十一月四日）

309 色あせし水木（みずき）は庭の隅に立ち今朝もほろほろ葉を落しける　（十一月五日）

310 外出をとりやめ今朝はのんびりとビール飲みつつドラマ楽しむ　（十一月六日）

311 そのかみの勤めし頃の同僚は年に一度の賀状あるのみ　（十一月七日）

312 テレビでは吹雪のニュース伝えおりストーブともす立冬の夜　（十一月八日）

313 久々にモチーフ並べ絵具出し油の匂い嗅ぎて楽しむ　（十一月九日）

(314) 考えれば心うつ絵の無かりけり電車に揺られ思い起こすも　（十一月十日）

(315) デパートの売り場歩けば早々とホワイトクリスマスの曲流れくる　（十一月十一日）

(316) その昔線路の脇の道添いに咲きし菊花は今年も咲けるか　（十一月十二日）

(317) 金も無く名も無きわれの楽しみは朝のビールでただ眠ること　（十一月十三日）

(318) 痔の痛み知るすべもなき少女等は電車の中ではしゃぎておれり　（十一月十四日）

(319) 親も子も晴れ着姿で行き交いて氷川の森は賑わいにけり　（十一月十五日）
——麻里菜の七五三詣につきそいて——

(320) 車窓より見れば冷たき雲厚く冬の気配の濃くなりにけり　（十一月十六日）

(321) 窓からはふ春日和の陽の射して電車の揺れに眠気もようす　（十一月十七日）

(322) 手を洗いハンドクリームすり込みて木枯し吹ける季節となりぬ　（十一月十八日）

(323) わが母は志木に移りて六階の富士の望める部屋に住みけり　（十一月十九日）

(324) のんびりと手製のふりかけ作りつつ久々に降る雨の音聞く　（十一月二十日）

(325) ピカソとは如何なる人ぞ偉大なるその才能を不思議に思う　（十一月二十一日）

(326) 待つ人を捜すに骨の折れるほど大宮駅に人のあふれる　（十一月二十二日）

(327) 小庭には落葉つもれど何となく気持滅入りて除く気もなし　（十一月二十三日）

(328) 鈴生(すずな)りの柿は熟れすぎ地に落ちぬ柿とることを人は忘れしか　（十一月二十四日）

(329) 加湿器に水を入れつつ思うなり歳ごと早き時の流れを　（十一月二十五日）

(330) 「吉宗」と「知ってるつもり」楽しみに風呂に入るなり日曜の夜　（十一月二十六日）

(331) ラジオより今流れるは「メモリー」ぞ友への手紙筆置きて聴く　（十一月二十七日）

(332) 寒風に凍(こご)えしからだ湯に沈めぬるき湯船に熱き湯を足す　（十一月二十八日）

(333) 乳飲子と昼寝をすれば泣き声のその激しさに吾も目覚めぬ　（十一月二十九日）

(334) 孫は今妻の真似して神前で手を合わすなりシャッターをきる
——鶴岡八幡宮にて——
（十一月三十日）

十二月

(335) 夜祭りのポスター見れば懐しき太鼓の音に胸おどる頃
（十二月一日）

(336) 窓際に咲くサボテンに水やればガラス戸越しに陽を浴びており
（十二月二日）

(337) 貧しきが強き味方になるというイブモンタンの生涯に知る
（十二月三日）

(338) 快き電車の椅子に揺られつつ冬の陽浴びて眠る人々
（十二月四日）

(339) ポインセチア、クリスマスツリーは目立つとも銀座の店に人影の無し
（十二月五日）

(340) 加湿器をも一つ欲しと思えども余裕のなきを一人悲しむ
（十二月六日）

(341) 孫はいま吾のハガキを口に入れ舌でしゃぶりて食いちぎりける
（十二月七日）

342 朝起きてまずカーテンを開け放つ雲一つなき曙の空　（十二月八日）

343 早暁に目覚めキャンバスに向いおれば外は激しき木枯しの音　（十二月九日）

344 組み立てのその巧みさに感じつつ「吉宗」のドラマ今宵終りぬ　（十二月十日）

345 まだ暗き朝に目覚めて墨をするストーブの音傍らに聞き　（十二月十一日）

346 のんびりと風呂に入りつつ今日の日を平凡な日をふりかえりける　（十二月十二日）

347 わずらわしき浮世の仕事一つ減り帰りてすぐに妻に話せる　（十二月十三日）

348 いにしえの宿場の店をしのびつつ古りし小部屋で友と酒飲む　（十二月十四日）

349 ただ一人風呂を洗いて湯を満たしのんびりと入る妻は帰らず　（十二月十五日）

350 デッサンを一つかき終え裏側に今日の日付を書き込みにけり　（十二月十六日）

351 ただ耐える法事の部屋の椅子席に秩父の里の底冷えの午後　（十二月十七日）

(352) 孫達を連れて出かける妻と吾師走の風の冷たき中を　（十二月十八日）

(353) 近頃は弱き酒をば好みける歳とりしこと悲しかりけり　（十二月十九日）

(354) 年賀状考えし人うらみつつ筆を走らすこの年の瀬に　（十二月二十日）

(355) 乳飲み子と風呂にはいれど笑顔なく眠さこらえて声も出さざり　（十二月二十一日）

(356) 忙しき中をのんびり歩めるは吾一人のみ師走の街を　（十二月二十二日）

(357) わが母は姉の家にて床を上げ物言えぬまま米寿となりぬ　（十二月二十三日）

(358) 生前は会いしことなき女流画家の頻のあたりに花を供える
——黒田久美子画伯の葬儀に手伝いとして参列する——　（十二月二十四日）

(359) 底冷えのするアトリエに一人いればうなりをあげて吹く風の音　（十二月二十五日）

(360) 鉢植えの蕾もちたる山茶花（さざんか）の風にふるえて開かざりけり　（十二月二十六日）

(361) 年の瀬も変らず部屋に篭りいて構図決まるを喜びにけり　（十二月二十七日）

362 年末の街を歩けば人々のみな疲れたる顔して行けり

（十二月二十八日）

363 「万世」で息子家族と食事とる吾の膝にて孫は眠れる

（十二月二十九日）

364 たまりたる孫のアルバム貼りながら一年回顧のラジオを聞ける

（十二月三十日）

365 アトリエに百二十号の絵のありて貧しき年の今暮れむとす

（十二月三十一日）

小菅　章雄先生

埼玉大学助教授の父、小学校教師の母という環境で育ち、教師への道は進むべき当然の選択であった。中学校教師として三十余年、美術と国語の教べんをとる。

一九五九年、保健室内の医療器具などをモチーフにした油絵作品が日展初入選、室内静物を描いた作品で第15回、第23回の日展特選を受賞した。

「まずは多くの優れた作品を鑑賞すること。絵筆を持ってキャンバスに向かうと心が豊かになる。絵の好きな人が集まっている教室はなごやかで、指導もまた楽しい」と語る。人間の持てる力には限りがあるから、趣味は折々に書きとめる短歌と歌舞伎鑑賞にとどめているという。悠然としてなお温かく、絵画に向ける内なる情熱を感じる。講座を受け持って十年、受講生からの信頼も厚い。

光風会評議員、日展委嘱。

浦和「土曜デッサン」「日曜油絵」講師

平成七年 歌の日記

○1996年(平成8年)3月19日発行

○著者　小菅章雄

○(〒)330　大宮市東宮下365-11

○(TEL・FAX)048-683-2711